

トピックス 瑞江鶴の会 27 年度精勤者表彰

瑞江鶴の会の 27 年度の精勤者を、最終練習日の 3 月 29 日（火）に以下のとおり表彰しました。

穂本久子さん、村松圭一さん、蟹谷幸子さん、百沢恵美子さん。

亀戸 SC 教室が創設 25 周年を迎える

亀戸スポーツセンター教室は 27 年度最後の練習日の 3 月 29 日（火）に、一年間の皆勤者と精勤者を以下のとおり表彰しました。

皆勤賞；西野進一郎さん（6 年間連続して皆勤です！） 精勤賞；松田早苗さん

また、4 月 5 日から新年度が定員一杯の 50 名で始まりましたが、当健康太極拳教室は 1991 年の創設以来満 25 年を迎えたこととなります。当初の講師は故豊島なつ江先生で、茶木が 2001 年からそのあとを継いでおります。

発足間もないころに故楊名時師家が応援に駆け付けてくれた珍しい写真をご紹介します。中央花束を持つのが故楊名時師家、その左の道衣姿が故豊島なつ江先生です。【写真提供は藤岡純子先生。】



閑人閑話 世界一貧しい大統領の名言

先ごろ来日した南米ウルグアイの前大統領「ホセ・ムヒカ」（80 歳）の言行が話題になっています。世界一貧しい大統領と言われるゆえんは、在任中、公邸に住まず、公用車も使わず、農場の自宅から 30 年乗り続けている車を運転して毎日出務し、また報酬の 9 割を慈善事業に寄付し続けたことによります。

その南米の小国の大統領が一躍有名になったのが、2012 年にブラジルで開かれた国連の「リオ会議」（持続可能な開発会議）での名スピーチで、その内容は、現代のグローバリズムと経済拡大主義に対する痛切な批判です。一部をご紹介します。

- いま、世界はこのグローバリズムと経済拡大主義をコントロールできていない。逆に世界が、国家が、これに支配されているようだ。
- 我々は経済発展するために生まれてきているわけではない。幸せになるためにこの地球上に生きている。人生は短い。命より高価なものはない。
- 環境の未来を本気で議論するなら人間の幸福こそ、まず第一に考えるべきテーマである。これは明らかに政治の問題だ。
- 人は物を買うときは、お金で買っているのではなく、人生の時間を割いて買っているのだ。幸せとは物を買うことと勘違いしているのではないのか？
- 貧乏な人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ。
- お金が大好きな人は政治の世界では危険な存在だ。お金が大好きな人はビジネス、商売に身を捧げ富を増やそうとする。しかし、政治とはすべての人々の幸福を求める闘いなのだ。

また、今回、4月7日に東京外国語大学で学生たちに対して行った講演(下記)もすばらしいものです。『“私たちは今幸せに生きているのか”ということを常に考えることです。私たちは多くの富を抱え、科学技術が進歩した時代に生きています。150年前と較べて人間の寿命は40年も伸びた一方で、軍事費に毎分200万ドルもかかるようになり、世界で最も裕福な100人ほどが人類の富の半分を所有するようになってしまいました。こうした不均衡を作り上げたルールが支配する世界になっています。若い人には私たちの愚かな過ちを繰り返さないでいただきたいのです。』

『私は修道士のように生きろと言っているのではありません。富に執着するあまり絶望にかられる人生を送ってほしくない、ということです。些細なことではあっても人間にとって重要なもの、例えば愛であったり、子供を育てることであったり、友達を持つこと、そういうことのためにこそ人生の時間を使ってほしいと思います。生きていること自体が奇跡なのですから。』

同氏は、今回発覚した「パナマ文書」にも言及していますが、まさに、世界中で、得体のしれない、組織か、グループが、金融を操り、途方もない富を、税金を逃れながら蓄積しつつあります。まさに彼が言うように国家も、国連もこの事態を制御できない状態です。代わりに国家財政は大赤字、民衆の窮乏化は広がる一方というのが大方の国の現実なのです。

一方では消費の拡大を煽られているのですから、まさに物を買うために働かされているようなものだ、彼は説いているわけです。私も、まったく彼の主張に共感します。いつも申し上げていますが、経済を発展させるために、無理やり買わされているのではないのでしょうか。テレビの通販などで、“優しく脅迫されて、静かに洗脳される”ことの無いように、老子の言葉ではないですが、『足るを知る者は富む』を心に刻んで、穏やかに、心豊かに、暮らしたいものです。

それにしても、これから世界はどうなるのでしょうかね。ものすごく危うい瀬戸際に来ているような気がしてなりません。

さこう べん

左顧右眄 (再開) 【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

ホーチミン

第21回 胡志明の『獄中日記』を詠む～その2

(4月号に続いて、『獄中日記』をご紹介します)

粥 攤

路旁樹影涼陰下
一椽茅蘆是『酒樓』
冷粥白鹽供食譜
行人過此暫停留

粥の店

ミチバタノ樹ノ下陰ノ涼蔭ニ
『酒樓』ト名乗ル小屋掛ケノ
品書キハタダ粥ト塩
アアシバシノ憩イ我ニ与エヨ

路 上

脛臂雖然被緊綁
滿山鳥語與花香
自由覽賞無人禁
頼此征途寂滅涼

路スガラ

手足ハタトエ縛ラレイテモ
山々ニ鳥ハ鳴キ花ハ香ル
コレヲ楽シムヲ咎ムルモノナク
虜囚ノ旅ノ寂寥オオイニ滅ズ

黄 昏

風如利劍磨山石
寒似尖鋒刺樹枝
遠寺鐘聲催客步
牧童吹笛引牛歸

夕暮レ

風ハ山ノ石ヲ磨クホドニ鋭ク
寒サハ樹枝ヲ刺スホドニ嚴シ
暮鐘ニ歩ヲ急カサレル囚徒アリ
笛ヲ吹キ牛ヲ引イテ帰ル童アリ

今の広西チワン族自治区の南端、ベトナム国境あたりから、南寧を経てついには桂林まで、およそ500KMもの距離をほとんど徒歩で、かつ手枷、足枷のまま、猛暑から厳しい寒さの季節まで、病いと飢えに苦しみつつ、この虜囚の旅は続くのである。なんという苛酷な旅であろうか。

久雨 雨続ク
九天下雨一天晴 一日の晴レ九日の雨
可恨天公没有情 恨ムベシ天モ無情ト
鞋破露泥汚了脚 破レ草鞋デ泥土ノ道ヲ
仍須努力向前行 ナオ強イラレテ歩ヲ運ブ

到桂林 桂林ニ到ル
桂林無桂亦無林 桂林ニ桂樹無クマタ林無シ
只見山高與水深 タダ山高クシテ水深ク
榕陰監房真可怕 榕樹ノ陰ニ獄屋ハ眞シ
白天黒黑夜沈沈 昼ハ陰々夜ハ滅々



榕樹；南方産のガジュマル（上の左右の木）、あるいは類似の常緑大樹をいう。【上；桂林近郊 2006年6月写す】

惜光陰 光陰ヲ惜シム
蒼天有意挫英雄 天ノ試練トハ思エドモ
八月消磨拮据中 囚ワレテ失イシハヵ月ノ
尺壁寸陰眞何惜 惜シムベシ千金ノ重ミヲ
不知何日出牢籠 未ダ知ラズ出牢ノ日ヲ

こうして、ついに当時の省都「桂林」まで連れてこられた彼には、さすがの風光の地「桂林」も、ただ彼を苦しめる陰鬱な牢獄そのものでしかない。

また、降り続く雨に天の無情を嘆き、囚われの身を天の試練と受け止めつつも、失った時の重みを嘆くのは、長途の旅と拘留生活によって心身ともに痛めつけられた“英雄”の唯一見せた弱さであったのだろうか。ともあれ、彼は、詩作という武器によって、長い孤独な闘いを闘い抜いたのである。合計74首から成るこの“獄中日記”の巻末を飾る次の詩で、彼はそれを詠いあげている。

看千家詩有感 「千家詩」*に想う *千家詩；中国の古典詩集の名前
古詩偏愛天然美 古詩ハ天然ノ美ヲ偏愛スルコト
山水煙火雪月風 風花雪月雲山水ノ如シ
現代詩中宬有鐵 現代ハ詩格ヲ強固ニシテ
詩家也要會衝鋒 詩家ハ詩ヲモッテ闘ウベシ

こうして、不撓不屈の精神で闘い抜いた彼は、病で死ぬこともなく、また殺されることもなく、ぶじ帰国するのである。

もともとは、毛沢東の率いる中国共産党との連携工作の目的で中国へ潜入したのであるが、運悪く蒋介石軍に捕らえられてしまったのである。ところが、フランスによるインドシナ統治は中国に対する脅威であるとの認識から、蒋介石はベトナムの独立運動を支援し、強化しようという方針もあって、一転して妥協が成立して、釈放されるのであるが、まさに、「敵の敵は味方である」という中国人の哲学を地で行くものであるとつくづく感心する。

余談を一つ。ここに引用した中の「到桂林」の詩をよんで奇異に感じたのは、あの天下の奇景に対して彼が何らの詩的、あるいは美的感慨を抱かずに、たんに、“只見山高水深”と言ひ捨てていることであつた。後段を強調したいがための修辭的表現かとも考えてみたが、釈然としなかつた。

それが、別の本を読んだ時に解明したのである。つまり、彼が中国に潜入したのは、中国との国境にごく近い対仏抵抗同盟「ベトミン」の秘密基地パクホからであるが、なんとそこは、典型的なカルスト

地帯で、桂林と全く同じような風景——佇立する異形の山々、多くの洞窟、清流など——が展開しているところなのだそうである。秘密基地はその洞窟に設けられていたのである。ということで、彼にとっては、何ら目新しい風景ではなかったのである。また、彼が桂林に着いたのはすでに冬のころであったので、桂林を彩る桂樹“キンモクセイ”の花の芳香に酔うこともなかったということである。

(この項終わり)

アーカイブス「雲の手通信」 (再掲・昔のコラム)

(4月号に引き続いて「河口慧海」についてのコラムをとりあげました。)

健康妄語録 「河口慧海日記」に見る元気回復・病気養生の秘訣 (2007年7月第37号)

今年5月に「河口慧海日記」(講談社学術文庫)が刊行されましたが、たいへん貴重な資料として着目されています。それは彼の名著「チベット旅行記」のなかではあえて明らかにしていなかったチベット密入国に際しての具体的なルートや協力者たちの名前などが記されているからです。世界中の探検家や登山家などが、今日までそのルートを推理したり実際に踏破を試みたりしてきたわけですから、それだけでも大変インパクトのある資料といえます。私も早速読んでみたのですが、別の意味で非常に驚きまた深く感銘しました。

その日記によると、1900年(明治33年)3月10日、慧海はそれまで機会を窺って滞在していたネパール山中のツァーラン村を出立してよいよチベットへ向かいます。周囲を欺くため回り道をしながら、同年7月4日についてチベット国境を標高5,411mの「クン・ラ」で越えます。9月にチベット西部の聖山カイラスまで西進し、ここで反転して東へ東へと歩を進め、目的とする首都のラサには、翌1901年3月21日に到着しております。距離にして2000キロ以上と推定されます。その間の1年間、ありとあらゆる苦難、危難が彼を襲い続けます。彼自身の表現を借りると、「秘越間道の難」に始まり「重荷負担」「険路足破」「渡河流没」「凍雪瀕死」「劫盜奪品」「飢餓凍寒」「依雪眼病」「猛犬嚙足」「無銭旅行」の「十難」に遭ったということです。もちろん高山病にも悩まされ、途中では吐血や下血にも苦しみます。薬品の名前が出てくるのは6月15日リュウマチの痛みに「カンプラチンキ」(樟脳から作った薬品)を塗ったとあるのみです。旅の途中で荷物はほとんど失ってしまうのですから、この「カンプラチンキ」も二度と日記には登場してきません。

また、彼は宗教上の信念から、この旅でもずっと「不非時食戒」と「不食肉戒」を守っているのです。食事は午前中に一度だけ、それも米や麦、麦粉など粗末なものばかりです。(お茶だけは朝と夜に飲んでいました)

ではどうしてこのような過酷な旅を全う出来たかということ、それは座禅と読経なのです。「法華経読誦三昧三時間」「入禅に入る」「夜四時間三昧耶」「三時間入観念」などの記述が連日のように記されています。すごいものです。

これは現代的に解釈すれば、座禅や読経によって自律神経を最大に活性化させ、一方では大脳皮質を休ませ、また深い呼吸によって新陳代謝を促進させ、自然治癒力を働かせることによって、疲労を回復させ、怪我や病気を治癒するということですね。それにつけても彼の信仰心と信念の強さにはただただ頭が下がるばかりです。



熊本大地震を詠う

思わぬに熊本襲いし大地震東北復旧いまだ成らぬに
大地震起きたる後で断層地図教えられてもなぞか虚しき
活断層地図つくづく眺めれば逃げる地のなき日本とぞ知る